

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12460

研究課題名（和文）セクハラ・性暴力問題の女性のエンパワメントによる解決のための比較社会学的研究

研究課題名（英文）Comparative Study about Sexual Harassment and Sexual Violence by the Empowerment of Women

研究代表者

牟田 和恵（Muta, Kazue）

大阪大学・大学院人間科学研究科・名誉教授

研究者番号：80201804

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：韓国の女性のアクティビズムは「韓国女性運動の四世代」と呼ぶべき多層の有機的連携協力が基盤となっている。しかし近年の女性の地位向上でミソジニーが広がり、サイバー性暴力が手軽・安易、かつ強力に、女性への反撃攻撃を行う手段を提供している。また、スコットランドではトランスジェンダーの権利を拡張する法整備の進行により女性の安全の確保を理由としてこれに反対する女性グループとの対立や物理的暴力的な接触を含む葛藤も生じている。この問題については、韓国においては女性運動の立場とアカデミアのフェミニズム研究が必ずしも連携しておらず、むしろ乖離が生じている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

さまざまなマイノリティの人権の擁護は当然推進されるべき課題であるが、近年急速に広がっているトランスジェンダーの権利の推進は、女性の安全や権利との両立という点で、問題や困難も生じさせていることをスコットランドや韓国との比較研究によって具体的に明らかにできた。アカデミアにおけるフェミニズム研究はこの点で必ずしも問題解決に貢献できておらず、女性たちの運動とのさらなる協力や連携が求められていることも明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：Women's activism in Korea is based on a multi-layered, organic partnership and cooperation that we might call the "four generations of the Korean women's movement. However, with the recent rise in women's status, misogyny has spread, and cybersexual violence provides an easy, cheap, and powerful means to launch counterattacks against women. In Scotland, the ongoing legislation to extend transgender rights has also led to conflicts, including confrontations and physical violent contact with women's groups that oppose this on the grounds of ensuring women's safety. In Korea, the position of the women's movement and feminist research in academia on this issue have not always been aligned, but rather diverged.

研究分野：ジェンダー研究

キーワード：性暴力 セクハラ ジェンダー平等 女性の安全

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

世界的に #MeToo 運動が活発化し、性暴力やセクシュアル・ハラスメントと闘う女性たちの動きがみられるが、韓国では欧米以上に #MeToo 運動が盛況で女性差別を変革していく社会的動きが加速している。そこには、韓国社会が「慰安婦」問題を鍵として性暴力問題への社会的認識を変化させていったプロセスが伴っており、被害国側/加害国側の違いを超えて日本社会への重要な示唆となりうる。日本では、セクハラ防止の法制化から約 30 年、刑法改正による強姦罪規定変更等がおこなわれたものの、被害にあった女性が「声があげられない」ばかりか、性暴力や性差別一般に抗議の声が上げにくい事態が続いている。これまで強調されてきたように、職場の上下関係や力関係のために「No と言えない」事情を十分に汲み取ること何よりも大切ではあるが、しかし中長期的視点からみれば、女性自身が意思を伝えることのできる力を身につけ、可能な限り声を上げられるようにしていくことが重要なのは言うまでもない。そこで、日本における性暴力・セクハラ問題についての取り組みをとくに女性のエンパワーメントを通じて前進させるために、韓国や他国の経験に学ぶ必要があるという認識から研究を開始した。

さらに、近年欧米で進展しているトランスジェンダーの権利運動は、フェミニズムや女性の権利運動と共有する部分はあるものの葛藤する面もあり、性暴力への抵抗・女性の安全という点は見逃せないところである。韓国およびイギリス(スコットランド)の経験と葛藤を学ぶことで日本に生かせることが期待できる。

## 2. 研究の目的

### 【研究目的 韓国から学ぶセクハラ性暴力問題への対応とジェンダー問題】

東アジアの家父長制的伝統を残し、世界ジェンダーギャップ指数においてもともに低位にあることに示されるように現在も女性の社会的地位が同様に低い日韓両国であるが、近年およそ 20 年間の韓国でのジェンダー関連施策の進展は目覚ましい。女性団体が大同団結した韓国女性団体連合会をエンジンとして政界・法曹界・官界のいずれにおいても女性の進出はめざましく進み、性暴力関連法や売買春に関する法の改正も行われている。こうした韓国社会における性暴力に関する社会的意識の変化の背後には、「慰安婦」問題についての 30 年以上に及ぶ取り組みの蓄積が作用している。

翻って日本では、ジェンダー平等の進展および性暴力についての法や諸制度の改革の進行は遅い。2017 年刑法改正、2023 年不同意性交等罪などの施行はあったが、被害者支援制度も未だ脆弱で、性暴力への対応はなお国際的にみても大きく立ち遅れた状況にある。セク

シュアル・ハラスメントに関しても取り組みは進んできたが、相変わらず被害は生じており被害を告発した女性たちへのバッシングは激しい。

こうした性暴力問題への対応の遅れ・社会的認識の浅さは、韓国の状況と併せて考えるならば、この20年間にわたる「慰安婦」問題についての認識の後退、一般にも広がる元「慰安婦」バッシングと連関がある可能性がある。「慰安婦」問題への取り組みの後退と性暴力問題の停滞は、単純な因果関係があるわけではないが、韓国の場合と比較するならば、女性の性被害を虚偽とし告発を無化しようとする点において、この二つの問題は深く通底し互いを補強しあっている。そこから、韓国において「慰安婦」問題の取り組みが社会的理解・賛同を得てきたプロセスを現在の#MeToo運動から遡って解明し、それを日本での後退の経過およびその背景と比較研究することによって、国際人権レベルに拠った「慰安婦」問題の解決と、今後将来の日本社会の性暴力問題の取り組みを前進させていく、両方につながる方策を得る。

### 【研究目的 「ジェンダー」概念の広がりと女性の権利獲得の停滞】

本科研費申請時の研究目的としては明記していなかったが、研究の進行の中で、トランスジェンダーの権利獲得の運動の進展が、本科研研究のテーマである女性の性的安全や尊厳と必ずしも適合しない状況が生じてきたこと、かつ、スコットランド Glasgow Caledonian University に客員研究員として滞在する機会を得たことから、性暴力問題の一環としてトランスジェンダーと女性の安全に関する問題についての検討を始めた。

スコットランドは英国内で高度な自治が認められており、イングランドよりもプロGRESSIVEなトランスの権利を認める法制度がすでに施行されており、とくに性別移行をより容易にする法が2022年にスコットランド議会で可決された。これは、英国会によりsuspendされたが、実質的にはこれにより公共スペースの更衣室やトイレ、矯正施設等での性自認による利用使用がさらに進行した。そしてスコットランドにおいては、トランスの権利運動の進展の陰で、女性の安全の確保を理由としてこれに反対する女性グループは、Let Women Speak等と名付けられた催しをスコットランドならびにイングランドで実施し、トランスの権利派と物理的暴力的な接触を含む葛藤を生じる事態となっている。

政治状況含め様々な事情は異なるが、日本でもLGBT理解増進法が成立し、男女共同参画事業が「ダイバーシティ推進」に方向転換し、むしろ女性の権利の運動が後退するのではないかというおそれもある。このなかで、スコットランドの事情を知ることは日本にとって示唆が大きいはずである。

### 3. 研究の方法

1) 韓国社会ではどのように「慰安婦」や性暴力被害者へのバッシングや差別を克服してきたのか。そして世界的な「ダイバーシティ」「トランスの権利の拡大」運動のなかで、女性運動家・法律家・フェミニスト学者はどのように立ち位置を定め取り組みを行っているのか、

主として聞き取り調査と資料・文献調査によって解明する。

2) スコットランドにおいては、トランスジェンダーの権利推進の法制化のプロセスについて、スコットランド議会図書館等での資料調査を行う、女性の運動をこれまで担ってきた公共セクターの近年の変化を Glasgow Women ' s Library を一例として調査する、トランスの権利運動の進展の一方で、女性の安全の確保を理由としてこれに反対する女性グループ、とくにレズビアングループに聞き取り調査および資料調査を行う。

#### 4. 研究成果

コロナ禍により、2020年度に予定していた韓国での長期現地調査を見送り、文献およびインターネット上での調査に注力し、2022年にスコットランド長期調査を行った。

その結果、以下の知見を得た。

1) 韓国では近年の女性のアクティビズムには目を見張るような勢いがあるが、そこには、「韓国女性運動の四世代」と呼ぶべき、多重の層がある。すなわち、80年代の民主化運動における女性運動家・90年代の世界的な女性運動の中で登場したフェミニスト運動家・民主化運動以降のインターネットを駆使して活動するヤングフェミニスト・2015年のメガリア登場以降のSNSを駆使してミソジニーと闘う女性たちである。比較的高齢の前2者が持っている組織力で後2者の若手フェミニストたちに支援するという有機的な連携協力がなされていることが、韓国の活発な女性運動の基盤となっている。しかし一気に社会の変革が進むわけではなく、とくにサイバー性暴力の被害は日本以上にすさまじいものがある。これは、日本も共通だが、東アジア的女性蔑視・女性の貞操観のベースの上に、近年の女性の地位向上で、ミソジニーが広がっていることに起因している。これは、ギデンスが現代にDVや性暴力が広がっている理由として指摘しているとおりだが、サイバー性暴力は、さらに手軽・安易に、かつ強力に、女性への反撃攻撃ができる手段を提供している。

2) スコットランドでは世界に先駆けてトランスジェンダーの権利を拡張する法整備が進んでいるが、これにより公共スペースの更衣室やトイレ、矯正施設等での性自認による利用使用がさらに進行し、女性の安全の確保を理由としてこれに反対する女性グループとの対立や葛藤も物理的暴力的な接触を含む葛藤も生じ、とくにレズビアン女性やムスリム女性への深刻な影響が生じている。

一方、ソウルにおいては、トランスの権利を推進する側および懸念する側の両方の中心人物たちに事情を聴取するとともに、先端的フェミニズム研究を行う研究者との意見交換を行ったが、とくにソウルでは、これまで歴史的に性暴力と闘ってきた女性運動の蓄積が現在のフェミニズム運動につながっていること、しかしながらそれとアカデミアのフェミニズム研究が必ずしも連携しておらず、むしろ乖離が生じていることがわかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 牟田和恵	4. 巻 0
2. 論文標題 なぜセクハラ性暴力にこだわるか：教育、研究、裁判の40年	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『フェミニズム・ジェンダー研究の挑戦：オルタナティブな社会の構想』	6. 最初と最後の頁 148-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/88607	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 牟田和恵	4. 巻 947号
2. 論文標題 フェミ科研費裁判から考える「学問の自由」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人権と部落問題	6. 最初と最後の頁 40-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牟田和恵	4. 巻 19号
2. 論文標題 フェミニズム・バッシング/ジェンダー・バッシングで失われてきたもの	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 女性・戦争・人権	6. 最初と最後の頁 14-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牟田和恵	4. 巻 12
2. 論文標題 家族の歴史とケアの倫理	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文化看護学会誌	6. 最初と最後の頁 36-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24658/bunkakango.12.1_1_36	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牟田和恵	4. 巻 65
2. 論文標題 法廷のなかの多面的現実	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ソシオロジ	6. 最初と最後の頁 104-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牟田和恵	4. 巻 NA
2. 論文標題 書評『存在しない女たち』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 しんぶん赤旗	6. 最初と最後の頁 8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 牟田和恵
2. 発表標題 フェミニズムの再生と再創造のために グローバリゼーション・ポストフェミニズム時代における課題
3. 学会等名 日本女性学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 牟田和恵
2. 発表標題 女性学を継承する
3. 学会等名 日本女性学会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 牟田和恵	4. 発行年 2022年
2. 出版社 松香堂書店	5. 総ページ数 156
3. 書名 フェミニズム・ジェンダー研究の挑戦：オルタナティブな社会の構想	

1. 著者名 牟田和恵ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 合同出版	5. 総ページ数 143
3. 書名 わたしは黙らない：性暴力をなくす30の視点	

〔産業財産権〕

〔その他〕

『フェミニズム・ジェンダー研究の挑戦：オルタナティブな社会の構想』 <a href="https://doi.org/10.18910/88593">https://doi.org/10.18910/88593</a>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------